SEIJYUSHA

犯罪の広場・鷲尾三郎

犯罪の広場

青樹ミステリー

犯罪の広場

昭和三十八年六月　五　日　印刷
昭和三十八年六月　十　日　発行

定価　三三〇円

著者　鷲尾三郎
発行人　土井勇
印刷人　山森忠一

発行所　有限会社　青樹社
東京都千代田区
神田神保町二ノ一八
電話(230)五三五一番
振替東京四七六四八

―落丁・乱丁本はお取替え致します―

犯罪の広場　目　次

悪の末路	5
悪魔の罠	29
悪の代償	94
悪女の顔	118
悪の囁き	145
悪の敗北	193
悪魔の海	250

装幀　岡本爽太

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

犯罪の広場

悪の末路

一

西武線の中井駅で下車した扶美は、すぐそばを流れている妙正寺川に沿つて、西の方へ向かつて歩いて行つた。彼女は片腕に食料品の入つた嵩高い紙袋をかかえていた。

昼間はそんなでもなかつたが、朝晩はさすがに立冬がすぎると、冷々として肌寒さが感じられた。川向うの小学校の校庭から吹いてくる風が、彼女の着ているまがい物のアストラカンのハーフ・コートを強く煽つていた。

彼女は頭髪をオカッパにしていたし下ぶくれのした頬ッぺたが愛らしく、白粉気のない艶やかな素顔が、まるで彼女を少女のようにあどけなく感じさせた。だが、実を言うと、彼女はもう二十二になつていた。

扶美は渋谷のローズ美粧院へ、住込みで勤めていた。美粧院は毎週月曜日が休日だつたから、彼女

はいつも日曜日の夜だけは、親戚の家で外泊することを許されていた。だが、しかし本当は、この広い東京に、彼女の親戚の家などは一軒もなかつたのだ。

橋を南へ渡つた四つ角に、一軒のタバコ屋があつた。彼女はふと思いついて、その店先で立停まると、店の陳列台へ重い荷物を置いて、夕食の膳を囲んでいた奥のほうへ声をかけた。

「パールを一つくださいな」

彼女がビニールのハンドバツクを開けて、中から財布を出そうとした時、四つ角の電柱の蔭に一人の男がたたずんで、彼女のほうを見ているのに気づいた。その男は、この夜寒にスプリングも着ていなかつた。彼女がその男についてヘンだと感じたのは、そんなところだつた。

「お寒くなりましたね。ありがとうございます」

奥から出てきたおかみさんが、愛想を言いながら出してくれたタバコを受け取つて彼女はそれをハンドバツクへしまうと、店から出た。その時電柱の蔭にいた男が、唐突に彼女のほうへつき進んで来て、あッ、という間に、勢いよく彼女と衝突した。

「あらッ！」

彼女の驚きの叫びと同時に、かかえていた紙袋が破れて、中から罐詰が二つと蜜柑が三つ転がり落ちた。

「やあ、どうも失礼」
その男は慌てて扶美にあやまると、からだを屈めて路上へ転がつた篭詰と蜜柑を拾つた、それを彼女へ渡した。
「紙袋が破けましたね。僕の新聞紙で包みましよう」
男がポケットから夕刊を取出そうとするのを、
「いいえ、いいんですの。すぐそこなんですからこのままでかかえて行きますわ」
と彼女は言つた。
それから彼女は篭詰と蜜柑を、破れた紙袋の孔へ押し込むようにしてかかえると、そこから急な坂道を登つて行つた。
——なんてヘンな男なんだろう——
彼女は折角はずんでいた気持が、そんなことで傷つけられたのをいまいましく思つた。無鉄砲な男の乱暴な振舞にたいして軽い怒りを感じたのと同時に、ふとさつきの男のそんな行動が、単なる出会頭の出来ごとではなくて、なんだかわざと彼女を待ちかまえていて、行きあたつたかのように思われた。そう考えると紙袋が破れたのも、男の予定の仕業のように感じられた。
——どうしてあんなことをしたんだろう。いつたいあの男は誰かしら…?——

にわかに胸をつく不安が、無意識に彼女の足を急がせた。

坂道の途中から横に入つた小路に、ペンキのはげた古いアパートがあつた。扶美の姿はその薄暗い玄関の中へ、吸いこまれるように消えて行つた。

アパート内の部屋では大人たちがラジオを楽しんでいる時間だつた。埃つぽい冷々とした廊下は、ドアの隙間から洩れる浪曲や、落語や、歌謡曲の娯楽放送が、低い天井にガンガンと大きく反響していた。だから、凡そ誰一人として、彼女が階段を昇つて行く靴音をきいたものはなかつた。

破れた紙袋から転げ落ちそうな蜜柑をささえながら、扶美はやつとドアの前までたどりついた。生憎と両手ともにふさがつていた。彼女はそれで仕方なく、小さく靴先でドアをコツコツと蹴つた。だが、内からは何の合図もなかつた。

「英次さん。あたしよ。ちよつと開けてね。蜜柑がおつこちそうなの」

彼女はドアへ寄りかかりながら、部屋の中の気配に耳を傾けていた。しかし室内はいやに静かで、男の返辞はなかつた。そこで彼女は、どうしたんだろうかといぶかりながら、やがて片膝を曲げて、腕にかかえた荷物をささえると、ハンドルをまわした。カチツと掛け金が外れる音がして、ドアが開いた。ところが、室内は真暗だつた。

彼女は投げ出すように上がり口の畳の上へ荷物を置くと、急いでドアを締めてから、電燈のスイッ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

チをひねつた。

パッと明るくなつた室内は、意外にも、まるで空部屋のように空ッポだつた。

「あらッ！」

と、思わず驚きの叫びが、彼女の口から洩れた。

扶美は咄嗟に、部屋を間違えたのではないかと思つた。しかし見覚えのあるナイト・クラブの広告カレンダーが、壁に貼られていた。だが、室内の洋服ダンスも外套も、そして棚の上のラジオも、家財道具は何一つも見当たらなかつた。彼女は意外のことに、ふらふらとよろめいた。

その時ふと彼女の眼が、棚の上に置かれた紙片へ注がれた。

一枚のレターペーパーと、千円紙幣が三枚、ただそれつきりだつた。

そしてそのレターペーパーには、英次の筆跡で、

「おれはおまえが厭になつたから、このアパートから立退くことにした。三千円は手切金だ。おれたちはもう何の関係もないんだ」

と、エンピツで走り書きがしてあつた。

扶美は信じられない思いで、その手紙を二度三度読みかえした。目が霞んだように文字が見えなくなると、大粒の涙がポロポロと紙片の上へ落ちた。こんな簡単な置手紙一枚で、彼から捨てられた悲

しさが急にせつなく胸へこみ上げてきた。
「英次さん。あまりだわ」
と、彼女は激しい口調で、叫ぶように呟いた。そして誰に訴えようもない悲憤の返報に、足もとに転がつていた蜜柑を蹴飛ばした。
ふと気がつくと、いつの間にその部屋へ入つてきたのか、一人の男がドアの内側にたたずんでいた。彼女は思わずギョッとした。
——さつきの男だ——
痩型長身で、二十六七の若さに潑剌とした、不敵な面貌の男だつた。
冷たい、突き刺すような鋭い目つきで、その男は、扶美の顔をじつと見つめていた。
「あなたは誰なの？　こんな所まであたしのあとをついて来て……」
彼女は腹が立つた。それで、ややヒステリーじみた甲高い声で詰問した。
「僕は警視庁の宗像六郎刑事だ」
彼女の顔色は、咄嗟に蒼白くなつた。
「警察は荒木英次の行方を捜査しているんだ。無論、君なら知つているだろう？」
「荒木がどんなことをしたんです？　あたしはあの人の行方なんか知りませんわ」

彼女は噛みつくように言つた。
「警察では、もう何もかもわかつているんだ」
「そう。それならいいじやありませんか？　荒木がどんなことをしたにしても、あたしとは関係のないことなんですから……」
反抗的な彼女の口調に、宗像刑事は不愉快そうに眉間へ皺を寄せた。
「いや、関係が無いとは言えないだろう。現に君は、彼に会うためにここへやつて来ているんだし、それに、彼のために食料品まで運んでいるんじやないか？」
「ええ、そうですわ。でも彼はわたしを捨てて行つちまつたんです。あたしをうつちやつたままで、行先も言わずに、ここから越して行つたんですわ」
彼女は急に悲しさが、胸へこみ上げてくるのを制しながら、さつきの置手紙を、宗像刑事のほうへさし出した。
「その手紙は、どんな暗号なんだ？　それが教えてもらいたいんだ」
「えッ、暗号ですつて？」
「それくらいのことは、警察ではちやんとわかつているんだ。君があとからやつてくるように、旅費まで置いてあるじやないか？」

「まあこの三千円が、旅費だつて？」
彼女は呆れたように宗像刑事の顔を見た。
その時ドアが開いて別な男が顔をのぞかせた。宗像刑事がドアの外へ姿を消した。刑事が一人でないことがわかつた。彼女は英次が、何か大変な犯罪をしたらしいことがわかつてきた。折があつたら逃げ出そうと考えていたが、すでに彼女への監視は厳重だつた。
さつきの宗像刑事がまた部屋へ入つてきた。
「あたし、帰らしていただきたいのです」
「どこへ帰るつもりなんだね？　ローズ美粧院？　それとも、ここ以外に婿曳の巣があるのかね？　それなら、そこを教えてくれないか？」
上がり口へ立つたままの刑事は、タバコへ火をつけながら、彼女へ皮肉な眼を注いだ。
「いいえ、ローズ美粧院へ帰るんですわ。うそだと思うなら、あたしについてきてちょうだい」
「折角だが、彼のねぐらがわかるまでは、君を自由にするわけにはいかないんだ」
「どうしてなんですの？　あたしは荒木の犯罪には無関係なんですし、彼に捨てられた女じゃありませんか？　あたしは自由を束縛される覚えなんてありませんわ」
「そんなことは弁護士にでも言うんだな。君が荒木の犯罪に無関係かどうかは、彼の陳述をきかない

うちはわからなんだ」
「それまであたしは留置されるんですか？」
「そうなるかもしれない。そいつは僕がきめることじやないんだ。しかし君が正当に、彼の隠家を教えたら、僕が旨く自由になれるように取計らつてやるよ」
——そんなことがあてになるものか——
と扶美は思つた。それに彼女は、彼の隠家など知つているわけがなかつたのだ。

二

警視庁の調べ室で一夜すごした扶美は、すつかり神経が疲労困憊してしまつていた。昨夜は十一時から三時間、ぶつ通して訊問された。それで、くたくたに参つてしまつたのだ。無論、朝まで一睡もしていなかつた。
英次から捨てられたこと、彼がやつた犯罪のことが、次から次へと思索の輪を描いて、彼女の頭の中に、浮かんでは消え、消えては浮かんだ。
「荒木は一昨夜、大井の鮫津町付近で運転手を射殺して、九千円余りの売上金を強奪したのだ」
捜査一課の内藤信吉警部から、初めて彼の罪状をきかされた時、扶美はそれが本当だとは思えなか

つた。しかしタクシーのダッシュ板にのこされた血染の指紋が、警視庁に登録されている彼の指紋とピッタリ符合する事実を見せられては、それ以外に疑う余地はなかつた。彼が恐喝と傷害の前科で、五年間小菅の刑務所へ服役していたことも、彼女は内藤警部から話されて、初めて知つたのだ。

——もしそれが、彼と関係を結ぶ前にわかつていたら……——

という後悔が感じられた。だが、今ではもうおそいのだ。そして彼を恐ろしい人間だと思うことはあつても、それがために、彼が厭になるという気持にはなれなかつた。だから彼女は、やはり今でも彼が好きだつたし、彼に対して強い愛情を感じていた。

彼女が英次を知つたのは、やつと四月前のことで、夜おそく店へパーマをかけにやつてきたのだ。その時は生憎マダムが不在で、彼女が一人きりだつた。六百円のコールド・パーマに、千円紙幣を一枚出して彼は、気前よく釣銭を取らずに、そのかわり彼女の手を握つた。

「僕は新橋のマイアミというダンス・ホールで、ダンスの教師をしているんだ」

と、彼が言つた。彼女はそんなことを信じていなかつたし、また本当の彼の職業を知りたいとも望まなかつた。それよりも、小柄だが、ちよつと凄味のある魅力的な容貌が、彼女の心を惹きつける、好きな男のタイプだつた。

そして彼から誘われるままに、次の日曜日には、銀座の地下鉄の駅で彼と会つた。一日中さんざん面

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com